

グルメ出世小説

ぼくは五度めし...

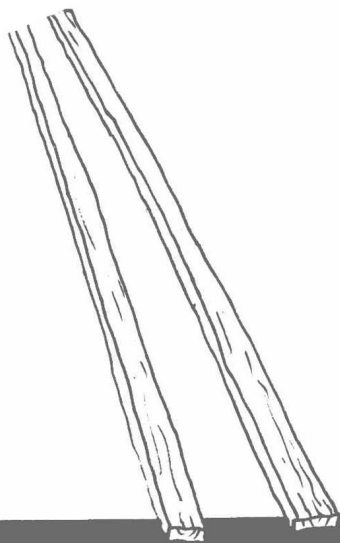
塩田丸男



塩田丸男

グルメ出世小説

ぼくは五度め



サンケイ出版



ぼくは五度めし…

昭和六十二年三月十日 第一刷

定価 九八〇円

著 者 塩 田 丸 男

発行者 神 谷 光 男

発行所 株式会社 鉄サシ出版

〒一〇二 東京都千代田区麹町六の一の二五
電話（東京）二三四一―五九（代）
〒五三〇 大阪市北区梅田二の四の九
電話（大阪）三四三―一二二（代）

印刷 製本 大日本印刷

万一、乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

目次



キーワードは王貞治

5



オムドン登場

53



天宙殺

101



ワイン祝祭

151



大賞の行方

199



ヨーヘイ丸、出航す

249

ブックデザイン ● 長尾みる

グルメ世小説

ぼくは五度めし…

谷須正好フーディー#



いきなり頭の上から声をかけられれば、誰だって驚く。それも外国人だったらなおさらだ。

田尾庸平は、いったん振りあおいだ首を亀の子のように、またすつこめた。

（ガイジンじゃないか！）

（しかも女だ）

（ガイジンの女がなんだって、おれに話しかけてこなくちゃならないんだ！）

彼は口の中で、呪文を唱えるように、ぶつぶつと文句を言った。

あくまで「口の中で」である。

声をかけてきたのが外国女性であると認識したとたん、ふだんは必ずしも活潑でなくもない庸平の発声器官は、その機能を緊急停止してしまったのだ。

（ちゃんと人の様子を確かめてから声をかけてくれよ）

庸平はもう一度、口の中で文句を言った。

（このおれの、どこが、英語がしゃべれそうに見えるというんだ）

まさに、そのとおりである。

田尾庸平。三十三歳。身長百六十三センチ、体重七十五キロ。出っ歯、出っ腹、短足、ガニ股。眼鏡をかけていないところを除けば、絵に描いたような原日本人の体型である。

当人もそのことは十分承知しており、お洒落しゃれなんかする柄ではない、と観念しているから、着ている背広だって、穿はいている靴だって、一目見て分かるバーゲンもので、気取ったところなんぞ、ただの一カ所もない。

たとえカタコトでも、外国語を口にする人種には見えない。

場所は日比谷交差点の角。

ちょうど昼休みの時間なので、ワイシャツ姿のサラリーマンや明るい色のユニホームを着たO
したちが、軽快に往ゆき来している。

ユニホームの胸に航空会社のマークがついている娘もいる。

あの子に聞けばいいじゃないか。

その前を歩いている青年だって、あれはきつと商社マンだろう。三カ国語ぐらいできるかもしれない。

他にいくらでもいるだろう。なにも、選よりに選よって、このおれに聞くことはないのに。

庸平はさっさと歩き出すこともならず、首をすくめて立ち止まったまま、見知らぬ異国の女性を恨うらんだ。

そんな庸平の心中を察しようともせず、彼女は、一段と庸平に顔を近づけて、

「△○●×……●△△××○」

と声をかけてくる。

「ノー！」

と庸平はやけくその声を出した。

「ノー、ノー、アイ キャン ノット……アイ キャン ノット アンダースタンド イングリ
ツシュ ノー ノー……」

両手を大きく、顔の前で交差させるように振った。

その顔の上に、シャワーのように笑い声が降りかかってきた。
笑い声の中から、こんどは日本語が聞こえてきた。

「オチツイテ、クダサイ。オチツイテ……」

庸平はびっくりして、声が出てくる方を見た。

しゃくれ上がった高い鼻。肉厚だけれどキュートな唇。血色のいい桃色の頬つべた。典型的
なアメリカ娘の顔が笑いかけていた。

声の主はもちろん彼女だ。

「私、^{ワタシ}イングリッシュ シャベッテイマセン。日本語デ、オ尋^{タズ}ネシテイルノデス。有^{ユウ}楽^{ラク}スタジオ
ニハ、ドウ行^イケバイイノデスカ」

アメリカ娘は庸平の顔をのぞきこむようにして、ゆっくりと言った。

なるほど、落着いて聞いてみれば、たしかに日本語だ。発音だってはつきりしている。近ご
ろの日本の娘たちの早口しゃべりよりはずっと聞きやすい。

「ユウラクスタジオ？」

「ソウデス。私ハ有^{ユウ}楽^{ラク}スタジオニ行^イキタイノデス」

●—キーワードは王貞治

「ああ、有楽スタジオか。それなら……」

と言いかけて庸平は、自分もそこへ行く途中であることを思い出した。

「一緒に行きましょう。これから僕もそこへ行くんですよ」

「ソウデスカ。アリガトウゴザイマス」

「すぐそこですよ。ほら、あのビルです。焦茶色^{こげ}のビルが見えるでしょう」

「コゲチャイロ？」

「焦茶色って分かりませんか」

「ワカリマセン」

「そうか。ま、いいや。とにかくついてきて下さい」

「ハイ。アリガトウゴザイマス。私^{ワタシ}ノ名前^{ナマエ}ハ、アルマ・フィッシャー」

「僕は、田尾庸平」

アメリカ人というのは、こんな時でもちゃんと自分の名前を言わなきゃいけないのか、と不思議がりながら、庸平は歩き出した。

「ワタクシノ日本語^{ニホンゴ}、下手^{ヘタ}デスカ」

アルマはたずねた。

「いや。下手じゃない。とっても上手ですよ。よく分かる。きれいな日本語だ。どこで勉強したのですか」

「アメリカノ大学^{ダイガク}デ、三年間^{ネンカン}、ソレカラ日本^{ニホン}ヘ来^キテ一年間^{ネンカン}、勉強^{ベンキョウ}シマシタ」

「たった四年ですか。それでそんなにうまくなるのかなア。日本語ってむつかしいでしょう」

「外国語ハ、ドコノ国ノ言葉デモ、ムツカシイデス。デモ勉強スレバ覚えラマスネ」

「それはその人の才能にもよるナ。僕は英語は苦手だ。いくら勉強しても駄目です」

「日本人ハ、アキラメルノガ早イデスネ。私が話シカケルト私ノ顔ヲ見タケデ、ア、外人ダ、返事デキナイト思ッテシマイマス。私が日本語デシャベツテイルノニ、英語ダト思イコンデシマウノデ困リマス」

アルマはそう言う、あはは、と笑った。

庸平は、さっきの失敗が自分ばかりではないことを知って、ほっとした。

「有楽スタジオに、なにしに行くんですか」

「コンテストニ参加スルタメデス」

意外な答に、庸平はびっくりしてアルマを見た。顔立ちは可愛らしいけれど、とりたてて美人というほどではない。それに、なによりも太めじゃないか。いま、太めははやらない。美人コンテストって柄ではないよ、あんた、と言ってやりたかった。

そんな庸平の表情を見てとったのか、

「食ベルコンテストデスネ。早く沢山食ベル競争デス」

とアルマはすぐに付け加えた。

「早食い競争か」

そういえば、テレビでそんな番組をやっていたっけ、と庸平は思い出した。

●-キーワードは王貞治

②

有楽スタジオの前にはざっと数えて六十人ばかりの行列ができていた。

女も多い。ガイジンもいた。いまの東京では外国人はもうすこしも珍しくないのだ。

アルマは行列の最後尾についた。

「じゃアね。頑張れよッ」

庸平は手を振って、アルマと別れ、正面玄関の受付に向かった。

玄関ホールにとりつけてある時計は三時一分前を指していた。約束した時間のちょうど一分前だった。

これが田尾庸平とアルマとの最初の出会いであった。

田尾庸平は異色のCMディレクターである。ただし、彼の場合、異色というのは褒め言葉ではない。

アメリカについて、世界第二位の広告大国である日本で、CM関連の職業は、若者たちがあこがれる花形職業だ。

CMディレクター

という肩書きがついただけで、女の子にモテまくるといふバカな幻想を抱いている若者も少ない。

サングラスにひげ。洗いざらしのジーンズのパンツをはいているのもいれば、パジャマみたいな縞模様しまのズボンのものもある。野球帽をかぶっているものもあるし、そばに寄ると香水の匂いがするものもある。

まともな恰好かっこうをしているのは一人もないが、それでいて妙に雰囲気ふんいきはできている。イナカくさくない。そういう中で、背広にワイシャツ、きちんとネクタイをしめている庸平は、異色といわざるをえない。

ふつうの人はそうでもないが、広告代理店やテレビ会社、新聞社の広告担当者など業界の人間は、庸平がはじめて訪ねていって名刺を出した時、一人残らず、名刺と庸平の顔を見くらべて、しばし首を振ったものである。

(ほんとうにあんた、CMディレクターなの?)

という疑問が彼らに首を振らせたのだ。

信用金庫の職員か、生活協同組合に勤めているといったほうがずっとぴったりする庸平の容姿風采ふうさいなのである。

いや、外見ばかりではない。中身のほうも現代の尖端せんたん的職業にふさわしい趣味、教養を庸平は必ずしももっているとはいえなかった。

第一に、すでに明らかのように、外国語および外国人に対して極端にヨワイ。

庸平がいま勤めているのは、アダムス・プロというちっぽけな広告代理店であるが、入社して一週間に、アメリカ人から電話がかかってきた。その電話をたまたまとったのが庸平だった。

受話器から飛びこんできた異国語をほんの二タ言、三言、聞くなり、庸平は、

「あッ、毛唐だッ」

と叫んで、受話器を放り出してしまった。

床に落ちた受話器はひびが入り、取り替えなければならなかった。その費用を庸平は初月給から差し引かれたのである。そのうえ、

「この国際化の時代に、毛唐だなんて差別語を使うことは絶対許さん。二度と、その言葉を口にしたら、即刻、クビだ」

と社長の真山から申し渡された。

第二に、大飯食いの大糞垂れ、である。

これも入社間もないころのことだが、社長がみんなに昼飯をご馳走してくれたことがあった。そのあとみんなで喫茶店に行った。

「おや、田尾はどうしたんだ。途中ではぐれたのか」

「いや、店に入った時にはたしかにいましたよ」

とみんなが心配しているところへ庸平が現われたのは、二十分も経ってからのことだった。彼は喫茶店のトイレでしゃがんで、ゆうゆうと排泄作業をすませてきたのである。

この時に限らず、喫茶店に入ると、すぐにトイレに行き、「大」のほうの用を足すことで庸平は有名になった。みんなは呆れて、

「お前、一日にいったい何度、糞をするんだ」

とたずねた。庸平は平然と、

「うちの田舎いなかのほうでは、五度飯三度糞、といひまして、一日に食事は五回、便所は三回がふうです」

と言った。

有楽スタジオでの用件をすませ、ラーメンを一杯食べてから、庸平はプロダクションの事務所にもどった。

プロダクションといつても、社長や事務の女の子をふくめて五人しかいない。群小、というよりは零細プロである。

事務所は西新橋にしんげしの古ぼけた四階建ビルの四階にある。エレベーターはなかった。

「月一ゴルフなんかより、うちの事務所のほうがずっと軀からだのためにいいんだぞ」
というのが社長の真山の口癖だ。

真山は階段を二段ずつ跳とんで、四階まで上がるのが得意だった。庸平も真似まねをしてみたが、一度で懲こりた。

階段健康法のおかげか、真山はたしかに頑健で、いつも大声を張り上げていた。

庸平がもどった時も、真山は椅子いすから立ち上がり、吼ほえるように、

「誰か知恵のあるやつはいないのか」

と大声を出していた。

デスクの上には、新聞が何枚も大きくひろげられている。